

日本天文学会 早川幸男基金による

渡航報告書

— NGC 1068 Workshop, Germany

リングベルグ城で行われたこの会議は、全くすばらしいものであった。

本当に「議論の時間」のある会議なのである。通常、研究会というと多くの人の発表を立て続けにひたすら聞き、少しばかり質疑応答があるだけである。しかしこの会議では、発表の時間と議論の時間の両方にきちんとウエイトがあり、各セッションには座長以外にそれぞれディスカッションリーダーなる人が決められていて、ひとしきり発表が終わるとこの決められた人が前に出て議論の方向づけを少しばかりする。すると続けて多くの人の意見が飛び交い初め、一つの問題に対して本当に議論が始まるのである。そして、例えば、ある問題を皆で考えているとき、一つの小さな問題につきあたったとする。すると、この問題なら誰それが詳しいはずだということになるのだが、この会議には、参加者は少なくとも各分野の大物の多くが顔をそろえているので、実際にその人がそこにいるわけである。そこで、その人が意見を聞かれ、それに基づいてさらに議論が進む、ということになる。

時に議論が高じて、混乱をきたすこともある。こういうときも、“This is a real discussion !” といって皆楽しく議論を続けるのであった。無論、私も、参加できるときには積極的に参加させてもらった。

会議のもう一つの特徴は、本当に「最新の成果」の発表の場所であったということである。OHPを使

って話をしているとき、新しい観測結果をちらっと見せてはすぐ隠すなどして、聴衆を焦らせて楽しむ発表者も何人かいた。皆が本当にその結果に興味があつて、それを早く見たがっているからこそ、これが面白いわけである。会議は、そのように皆が一緒になつてものを考えようとしている、そういうたつた雰囲気が進むのだった。

食事も城のなかで皆一緒に食べる。すると、参加者の多くは食事中もほとんど議論をし続けるわけである。私にとって、こういった個人的な議論の時間が豊富にあることは実にありがたかった。Coffee break や食事中、食事の前後に、以前から話をしたかった研究者たち、特に Robert Antonucci と多くの議論をすることができ、Coffee break など、休む間もない位であった。私は、偏光の計算に基づく HST archival data の解析結果について話をしたのだが、会議にはこのデータの取得者たちが来ていたので、こういった議論の時間に彼等からいろいろと詳しい話を聞くこともまたできたのである。そして彼等だけでなく、他の何人かの大物たちが、私の研究に対して意見やアドバイスを親切に述べてくれたのだった。

会議に使われた城というのがまたすごかった。予想をはるかに上回る大きさをしており、城内はまさに「探検」ができるほどの広さなのである。そこからの眺めもまた本当に美しく、実にすばらしい場所であった。

今回は、旅費の援助をいただき、本当にありがとうございました。最高の経験をさせていただきました。

1996年11月30日

岸本 真 (京都大学理学研究科宇宙物理学教室)